程明道の人間形成観と禅

久須本　文雄

程明道（一〇三二―一〇八五）の修学の目的は本性の至善に復帰することにあるので、その存養法は敬直義方を以て始まり、次に定性を以てし、而して識仁を以て終極としている。

彼は体仁定性の修為として敬以直内・義以方外を説いている（遺書、巻一）が、殊に敬を重視し、彼の人間形成論において最も緊要なものとされている。敬とは応事接物閑静無事即ち動静を通じて内を養う功夫で、放心を収め人欲を掃蕩して道心を存することに他ならない。これ即ち存主不懈の省察にして心を専一にする精一の功夫である。仏禅における所謂定は三摩地であるが、諸縁を放捨して専ら心を一境に住せしめ、妄念雑慮を断絶し一実の直心を現成する内観法にして、臨済義玄の所謂純一無雑（臨済録）であり、瑩山紹瑾の坐禅用心記に定を解して謂う所の観想無余である。道元は普勧坐禅儀において

放捨諸縁、休息万事、不思善悪、莫管是非、停心意識之運転、止念想観之測量。

と記している。明道の所謂持敬の功夫は禅学に所謂定と異にしないであろう。彼が

彼釈氏之学於敬以直内則有之矣。（遺書、巻四）

と記して、仏教に敬以直内の存することを認めている所に徴しても知られる。彼は敬を以て肝要な功夫としてこれを重視しているが、然し義を軽視するものではない。明道は

言不莊不敬則鄙詐之心生矣。貌不莊不敬則怠慢之言心生矣。（遺書、巻一）

と述べているが、茲に義以方外の要が存するのである。義方は外を方正にする道にして、義以方外なければ敬以直内は存し得ない。禅門に於いては言寡黙を慎み居処容儀を斉整ならしめ、行住坐臥常に禅心を失せざる外修的

功夫を修禅初入の門頭として重視しているもので、普勧坐禅儀の一節を見るに

乃正身端坐、不レ得二左側右傾前躬後仰一。

と、或は坐禅用心記には

道場須二清潔一、(中略)、常可二濯レ目洗レ足、身心閑静、威儀斉整一、(中略)、身無二所作一、口無二密誦一、心無二尋思一、六根自清浄、一切不二汚染一。

とある。かく言動を端荘恭謹(遺書、巻一)ならしめることはこれ即ち所謂戒であるが、戒はこれのみに止まらず諸悪莫作(消極的)・衆善奉行(積極的)即ち為善去悪に存するものである。蘭溪道隆の坐禅論に律仏外相とあり、坐禅用心記には戒是防非止悪とあり、六祖壇経には

即自心中、無レ非無レ悪、無レ嫉妬一、無二貪瞋一、無二劫害一、名二戒香一。(懺悔第六)

とある。戒は三学(戒・定・慧)及び六度(施・戒・忍・進・禅・慧)中の一つで仏教倫理の要諦とされているもので、蓋し明道の所謂義以方外は戒と称すべきであろう。義以方外が戒に当るならば、敬以直内は純一無雑観想無余としての所謂定に通ずるものと謂うべきであろう。明道の所謂居処恭(遺書、巻二)は義以方外であり、執事敬(同上)は敬以直内であって、恭敬即ち義方敬直の内外両面を仁体得の功夫として重視しているが、六祖壇経にも

常須二下レ心普行二恭敬一、即是見性。(同上)

と記して義敬即ち恭敬を以て肝要なものとしている。義方敬直は蓋し禅林の清規と謂うべきで、その義敬の功夫は彼が嘗て(齢二十二の時)親しく接して感化を受けた禅堂(長慶寺)の清規生活から得たものと思われる。茲を以て禅規が彼の功夫に及ぼした影響についてはこれを首肯するものであるが、然し全くこれを否定することはできないであろう。次に明道がこの敬義を以て仏儒を比較してこれを論じている所を窺うに

此道所二以不レ可二須臾離一也、然則毀二人倫一去二四大一者其分二於道一也遠矣、(中略)、彼釈氏之学、於二敬以直レ内有レ之矣、義以方レ外則未二之有一也、故滞固者入二於枯槁一、疏通者帰二於肆恣一(一作二放肆一)、此仏之教所二以為レ隘也、吾道則不レ然。(二程語録、巻五)

と。これに依ると仏教には敬以直内ありて義以方外存せず、故に滞固すれば枯槁となり、疏通すれば放肆となり、内外一途ならざるはその教狭隘なる所以であるとしている。明道は仏禅にただ敬以直内あることを認めているが、義以方外の点はこれを認めていない。かく仏教に敬直を許して義方を認めなかったが、

佗有二一箇覚之理一、可二敬以直レ内、然無二義以方レ外、

其直レ内者要レ之其本亦不レ是。（遺書、巻二）

に依ると、義方無ければ敬直も是ならずと断ずるに至った。結局明道は仏教に敬直のあることを認めてはいるが、然し義方を欠いた敬直となしてこれを非として排斥している。既に仏禅に敬直義方の存する所あるを論じておいたが、明道の論法は実に巧妙を極めるもので容易に首肯し難い。

次に明道の定性書に於ける禅的な思想について窺ってみよう。

彼は該書の初頭において定を解して

定者動亦定、静亦定、無二将迎一、無二内外一。

と記しているが、動も静も共に定にして将迎内外なきものとなしている。王陽明も彼と同じく動亦定、静亦定（全書、巻二）と述べ、唐の永嘉玄覚は証道歌一巻を著してその中に

行亦禅、坐亦禅、語黙動静体安然。

と記している。明道の所謂動亦定、静亦定は証道歌に所謂行亦禅、坐亦禅と趣を同じくするもので、蓋し禅語より得たものと思われる。禅においては寂静の境と応事接和の処とに関せず、動静共に見性の田地にして明道の説く所と異ならない。彼は動静共に定となしているが、畢竟動静一定にして、これ禅の動静一如の所で、大慧は静闇一如（大慧書、上）と、或は坐禅用心記には動静二相了然不レ生と称している。定性はこの動静一如の所においてなされるべきである。将迎内外なき所の所謂定は六祖壇経に外離レ相為レ禅、内不レ乱為レ定（坐禅第五）或は坐禅用心記に定是観想無余と説く所と通ずるものである。所謂性とは元来内外不立の玄であるが、性に内外の別をなして二本となすのは、物を以て外にありとなし己性を以て外物に従わしめるに因るとしている。彼はこの所を以二外物一為レ外、牽レ己而従レ之、或は以二己性一為レ随二物於外一と記しているが、これは禅に所謂心外見法・心外有物にして心外無理・心外無物を解せざるによると同じである。性に内外なきを不レ知二性之無二内外一と記している所は、六祖の所謂本性無二、無二之性、名為二実性一（懺悔第六）或は坐禅用心記に所謂心本無相にして、尚

心量広大、猶如二虚空一、無レ有二辺畔一、亦無二方円大小一、亦非二青黄赤白一、亦無二上下長短一、亦無レ瞋無レ喜、無レ是無レ非、無レ善無レ悪、無レ有二頭尾一。

（六祖壇経、般若第二）

清水本無二表裏一、虚空終無二内外一、玲瓏明白、自照霊然、色空未レ分、境知何立。（坐禅用心記）

と記している所と一般である。性は明道にありても禅に於いても、共に相対を絶したる無声臭無形状の絶対的本

体にして、無二が実性に他ならない。本性無二なるに以二内外一為二二本一となして主客内外を立するのは、仏教において我執・法執の二見を認める所と異ならない。内外を分看せば外誘を断ずることができざるのみならず遂に性を定めることは不可能である。

それでは如何にして性を定めるべきであるかの方法の問題であるが、これについて彼は

夫天地之常以二其心一普二万物一而無心、聖人之常以二其情一順二万物一而無情、故君子之学、莫レ若二廓然大公物来順応一。

と。天地の無心にして聖人の無情なるが如くにし、心をして廓然大公、物来りてこれに順応するにありとしている。天地の心は無私無妄にして一点の邪念なく通達無碍去来自由なるもので、この天地の心を以て心とすべきである。禅に於いては心をして天地虚空の広大無辺にして公無明妄なる如くならしめるもので、伝心法要（鐘陵録）には

此心明浄、猶如二虚空無二一点相貌一。
虚空之性、廓然不レ変、仏及衆生心亦如レ此。

とある。天地無心の心を心とすることは我の心を無心ならしめることに他ならない。沢庵禅師は無心を説明して次の如く記している。

無心の心と申すは本心と同じ事にて、固より定まりたる事なく、分別も思量も何も無き時の心、総身に広がりて全体に行渡る心を無心と申す也。どつこにも置かぬ心なり、石か木のやうにてはなく、留まる所なき無心と申す也。留まれば心に物があり、留まる所なければ心に何も無し、心に何もなきを無心の心と申し、又は無心無念と申す也。（不動智神妙録）

この沢庵の無心についての説明は実に簡明にして意を尽しているものと思われる。明道の所謂以二其心一普二万物一而無心は沢庵の所謂全体に行渡る心である。無心は即ち本心にして無所住而生其心底で、物来ればそれに順応するも、然も終始それに執することなきもので、六祖壇経には

用即徧二一切処一、亦不レ著二一切処一。（般若第二）

とあり、道元語録には

独存無倚、脱落全真、混然明二歴一歴於万象中一、卓爾活二鱗一鱗一於不疑之地一、如二月印一レ水而無レ痕、似二風行一レ空而不レ動。（永平寺語録）

とあって、所謂心随二万境一転、（中略）、随レ流認二得性一であることを要する。これ明道の所謂物来而順応の処であるが、一物一境に著するものではないとすべきである。

人には仏教に所謂煩悩としての情蔽が存するがために廓然大公の道に達することは至難である。即ち

人之情各有レ所レ蔽、故不レ能レ適レ道。

と。これ六祖壇経にも

世人愚迷、不レ見二般若一。　（般若第二）

開レ口便説二他人是非長短好悪一、与レ道違背、著レ心著レ

浄即障道也。　（坐禅第五）

と説示する所以である。この情蔽を将来せしめる所のものは自私・用智であって、これあるがために内外両辺の見に著し、遂に廓然大公の道に違背し、心をして物に順応せしめなくなるに至る。即ち

大率患在二於自私而用智一、自私則不レ能二以レ有レ為為一レ

応レ迹、用智則不レ能下以二明覚一為中自然上。

と。その自私は仏教に所謂我執であり用智は分別にして、かかる我執・分別の存するがために本然の霊覚性は蒙蔽されるのである。悪二外物一之心を以て無邪之地を求めんとするは、反レ鑑而索レ照或は艮二其背一不レ獲二其身一、行二其庭不レ見二其人一の類にして、孟子の所謂所レ悪二於智一者為二其鑿一也（離婁下）を引き私智を以て穿鑿すべきでないとしている。この所謂無邪之地は大我の世界で所謂無一物底の田地にして、悪二外物一之心は私智を弄する小我の世界である。かかる小我の相対界に於いて大我の絶対界を窺うことは不可能である。それで私智即ち我執・分別の見を断滅することを要すべきである。所謂莫妄想の所に本来の面目を現成し得るので、坐禅用心記には

其欲レ開二明心地一者、放二捨雑知雑解一、抛二下世法仏法一、

断二絶一切妄情一、現二成一実真心一、迷雲収晴、心月新明。

とある。外を非とし内を是とすることは内外二本の見を免れないものであるから、かかる内とか外とかの執着から脱離して無所住無分別の境地に至るべきである。茲を以て明道は内外を超越し、然もこれを絶したる所の両忘の世界を説いている。所謂内外両忘は六祖壇経に所謂内外不住、去来自由（般若第二）にして、我法二執から脱した人法二空の所で、畢竟一切皆空（万類悉く因縁所生にして実体なく自性なきもの即ち空と観ずることで、この空に徹することが要諦）と観想することに他ならない。坐禅用心記には

向二胞胎未生、不起一念已前一、行履工夫、二空忽生、

散心必歇。

とある。動静内外を両忘し澄然として無事なれば性定まり、かくすれば明鏡止水が万境如如の相を具現するが如く、昭明霊覚所謂柳緑花紅となり、物来るも自然に順応、何の煩累ともならず神通無碍活殺自在なる境地となる。即ち

両忘則澄然無事、無事則定、定則明、明則尚、何応レ

物之為レ累哉。

と。その所謂澄然無事は臨済の所謂本来無事にして無一物無尽蔵底である。廓然大公物来而順応は聖境にして、禅に所謂本地の風光・本来の面目で、廓然大公は達磨の所謂廓然無聖の処であろう。聖人における喜怒の情は不レ繫二於心一而繫二於物一にして、物が去れば喜悦もなく憤怒もなく哀楽愛憎の情感も存しない。物類に執せざる洒洒落落たる行雲流水の無住無滞的境涯であって、禅録に於いては随レ流認二得性一、無レ喜亦無レ憂と称している。定性の功夫には情蔽・自私・用智を翦除すべきものであるが、然しこれあるがために性を定め得られるのである。煩悩は断滅すべきものではあるが、これによって菩提を証得し、生死あるを以て涅槃を得るに至るのである。菩提には煩悩を要し、識仁定性には情蔽・私智を不可欠の条件とするもので、両者相即の関連性をもっている。茲を以て明道は定性篇の終に可レ見二外誘之不レ足レ惑と記して情蔽・私智を認めている所以である。

定性書における仏禅的思想を窺ったのであるが、所謂定性は禅の識心見性と趣を同じくし、その存養法は禅門に於ける接心の功夫と軌を一にするもので、殊に動静一定・内外二本・内外両忘・無心・廓然大公・物来順応・澄然無事等は禅の常套思想と異ならないと思われる。朱子と同時代の葉水心が習学記言に於いて

案レ程氏答二張氏一論レ定性一、動亦定静亦定、無二将迎一無二内外一、当二在レ外時一、何者為レ内、天地普二万物一而無心、聖人順二万事一而無情、拡然而大公、物来而順応、有レ為為レ応レ迹、明覚為二自然一、内外両忘、無事則定、定則明、喜怒不レ繫二於心一而繫二於物一、皆老仏語也。

（二程文集、巻二・宋元学案、巻一四）

と定性篇に仏老的色彩の存することを提示している所に徴しても知られ得る。茲を以て葉水心は

嗟夫未レ有レ自坐二仏老病処一而弁二老仏一以明レ聖人之道一者也。（同上）

と、殊に明道の学を非難している所である。要するに定性書は蓋し全篇仏教殊に禅的思想を以て横溢され宛然禅録に接するが如くであるから、多分に禅思想の影響を受けているものとすべきで、この点を看過することはできない。

次に識仁篇について窺見するに、明道は仁体識得を以て為学の究極的目的とし要道となしているが、これは禅門が見性成仏を以て眼目となし生命とする所と異ならないであろう。仁は禅学に於ける自性・仏性に当り、それが物心両面に於ける実体性をなすこと禅も亦然り。この本体的仁を以て渾然与レ物同体となし仁者以二天地万物一為二一体一（遺書、巻二）となして万物の同体を説く所は、

禅学に所謂天地与レ我同根、万物与レ我一体（坐禅論）にして物心一如底である。これ仁或は自性・仏性の平等にして普遍なること論を俟たない。仁体の識得は以二誠敬一存レ之而已と敬の功夫に存するものである。即ち敬則誠（遺書、巻一一）と。敬とは定或は修に当り、誠とは慧或は証に当るであろう。誠をして誠たらしめる所以の道は敬に存するもので誠・敬は相即不離である。これ六祖壇経に定・慧の関係を述べて

定慧一体、不二是二一、定是慧体、慧是定用、即レ慧之時定在レ慧、即レ定之時慧在レ定、即是定慧等学、（中略）、猶如二灯光一、有レ灯即光、無レ灯即闇、灯是光之体、光是灯之用、名雖レ有レ二一、体本同一、此定慧亦復如レ此。（定慧第四）

とある所と一般である。修証の関係について見るに、修中に証あり証中に修ありで互に不可離の体用関係にあって、修外に証を求め得られず修なき証はあり得ない。道元は修証是等（道元語録）或は修証自不二染汚一（同上）と修証の一如を述べている。敬誠の相即なるは禅学に所謂定慧一体・修証一如なる所とすべきである。臨済は無修無証無得無失一切時中更無二別法一（臨済録）と述べているが禅に於いては無修の修を真修とし無証の証を真証となして、修も証も超越したる所を絶対の境地とするもので、茲に本地の風光が現前するのである。絶対的本体としての仁は本来霊昭不昧の当体であるから、彼が不レ須二防検一不レ須二窮索一或は何防之有と記している所は、自性が本来清浄円満にして言慮路絶不可名状底の実相であるからして、私智を弄するを得ない所謂不修不断と同じで、坐禅用心記に

抛二下万事一、休二息諸縁一、仏法世法不レ管、道情世情雙忘、無二是非一無二善悪一、何防止之有乎。

とあるのと異ならない。本体は主客内外大小の相対性を超越したる絶対的存在なるを以て、此道与レ物無レ対、大不レ足二以用一レ之と記しているが、これ坐禅用心記に所謂挙体無二にして自性は一如体玄である。而して天地之用皆我之用と我以外に天地もなく、我即ち宇宙の自覚に達し得るのである。これは禅の心外無法にして六祖壇経に所謂万法従二自性一生（懺悔第六）或は道元の所謂万法これ一心、一心は是万法なり、山河大地は則ち是我心なり（道元語録）の所である。茲に於いて誠になり仁を識得して大楽の境地、即ち禅林における本来面目現前の絶対境に遊戯することができ得る。若も身に反観省察して誠ならざれば、主客内外の相対的観念に堕することとなる。これは以レ己合レ彼、或は定性書に所謂以二外物一為レ外、率レ己而従レ之こととなりて、性を内外に分看し遂に絶対

の境地に至り得ない。二物有レ対は定性書の以二内外一為二二本一にして、所謂人法二執で心外有法を認め実性が無二の性なることを知らざる謬見である。絶対の境地に至るには、孟子の所謂勿レ正、心勿レ忘、勿二助長一（公孫丑上）を要すべきで、未二嘗致二纖毫之力一ことが仁体を識得する所以の道となる。禅門に於いても雑念雑解を放捨し一切の妄情を断絶し得ば、心地を開明し得るとするもので、中峯明本の信心銘義解には

不レ得レ存二毫髮欣厭之情一則此心自然明白矣。
庶裏加二一毫心力一則不レ得レ為二虚明自照一矣。

とあるが、実体は三祖僧璨の信心銘に所謂至道無難唯嫌揀択なるものである。実体の識得に障碍となるものは、情蔽が拠って将来する所の習心に存するを以て、これを除去すべきであるとしている。情蔽とは煩悩に当り、習心とは煩悩の根本としての無明に相当する。坐禅用心記には五蓋（三毒五欲）煩悩皆従二無明一起とあるから、この根本煩悩としての無明の払拭が肝要である。

以上識仁篇に於ける禅的思想を窺見したのであるが、定性書ほどに禅的色彩は無いにしても篇中相当多く禅的思想が存していたことは看過できない。茲に禅学と関係あるものを挙げるならば、渾然与レ物同体・以二誠敬一存レ之・不レ須二防検窮索一・与レ物無レ対・天地之用皆我之用・二物有レ対・以レ己合レ彼・未二嘗致二纖毫之力一・昔日習心等がこれに相当するであろう。この識仁を定性及び敬直義方と共に戒・定・慧の三学に比して見るに、慧学とは煩悩を摧破し真理を徹見するにあるもので、所謂心地無瘡（六祖壇経、頓漸第八）・簡択覚了（坐禅用心記）にして識仁がこれに当り、定学とは心・意識の動揺を止めて静安な境地を現ぜしめるにあって、所謂心地無乱（六祖壇経、同上）・観想無余（坐禅用心記）にして定性或は敬直がこれに当り、戒学とは言動を慎む戒律で諸悪莫作、衆善奉行も所謂心地無非（六祖壇経、同上）・防非止悪（坐禅用心記）にして義方がこれに当ると思われる。定性書は論を俟たないが、識仁篇も敬義の思想と共に禅学に類するものあるを以て、仏禅の思想的影響を多分に受けているものとすべきであろう。大江文城が程朱哲学史論に於いて

その学の神髄とする所の定性識仁の諸篇を見るにさながら禅家摂心の方、法悦の境を説くものゝ如し。（九二頁）

と評する所宜なりと謂うべきである。彼に禅的思想が見られるのは、禅学の素養によるものにして禅を解せずして謂い得られるものではない。明道は彼自らも静坐し人にもこれを勧めたのであるが、彼の所謂静坐は坐禅に類

するものにして、これに依って功夫し性を定め仁域に達したものと謂うべきである。伊洛淵源録にも

明道教二人静坐一、蓋為下是時諸人相従只在二学中一無中甚外事上故教レ之如レ此、今若無レ事只得二静坐一、若特地将二静坐一做二一件工夫一、則是釈子坐禅矣。（巻三）

と記している。

識仁篇についての論述を終るに当り、併せて明道の人生観と禅のそれとについて叙してみることとする。

彼が光風霽月を以て懐となし胸中瀟洒悠悠自適の高趣ある風格は、茲に天人合一・物我一体・死生一如の人生観を醸すに至るは論を俟たない。彼の所謂仁者以二天地万物一為二一体一莫レ非レ己（遺書、巻二）或は万物皆備二於我一（同上）而して生死について

死生存亡、皆知レ所二従来一、胸中瑩然無レ疑、（中略）、死之事即生是也、更無二別理一。（同上）

昼夜猶二生死一、生死猶二古今一。（遺書、巻六）

と称する所は聖域に至った省悟の心境と謂うべきである。彼は禅学に於ける天地同根物我一体の理を達観し、生死を一条とし死生の外に超然とする禅の人生観に立つものと謂える。禅家に於いては生死を以て不生不死なる大海の波瀾となし、生生不生死死不死の所に至るもので、一休禅師は

ほんらいもなき古の我なれば死にゆくかたも何もなし。（水鏡目なし用心抄）

生に生を重ね死に死をつぎ、うき沈むのみなり。此の心と云ふ物はいかにとはんじ申すに形もなき物なり。形なき故に消えうせず、然れば生もなく死もなし。（仮名法語）

と説き、道元も次の如く記している。

生也無レ所二従来一、猶如レ著レ衫、死也無レ所二去処一、猶如レ脱レ袴、万法本空、一掃二何処一、到頭生死不二相干一。（永平寺語録）

死生一如の理を達観したる明道が

予天民之先覚者也、予将下以二斯道一覚中斯民上。（語録、巻八）

と述べる所は、仏陀と同じく覚者を以て自任したる態度にして実に偉なるものと謂うべきで、

人能放二這一箇身一、公共放二在天地万物中一。（同上、巻二）

も大乗的精神の発露と謂える。彼の口吻の中に悉有仏性観が窺われ、自覚より更に高次の覚他の段階に至っているものと評すべきであろう。禅家と趣を異にしない死生観を有している彼が、仏禅の死生観に対して如何なる見解を抱いているかを窺ってみよう。即ち

仏氏只是以二生死一恐二動人一、可レ怪二千年来、無二一人覚一、此是被二他恐動一也、聖賢以二生死一為二本分一、事

無レ可レ懼、故不レ論二生死一、仏之学為レ怕二死生一、故只管説不レ休、（中略）、要之只是此箇意見皆利心也。

（語録、巻一）

釈氏本怖二死生一為レ利、豈是公道。　（同上、巻八）

と。仏氏は自ら死生を怕れるのみならず、死生を以て人を恐動するが、然しこれは公道でなく死生は本分の事にして、毫も恐驚すべきものでないと駁し、更に仏氏は上掲に所謂

語黙猶二昼夜一、昼夜猶二生死一、生死猶二古今一。

の理を識得せざるものとして

仏氏不レ識二陰陽昼夜死生古今一。　（語録、巻八）

と。これ仏氏は死生の一如不二なるに通ぜざるものとなしている。仏氏が人生を以て泡沫夢幻なりとするに対して生死成壊自ら此の理あり幻となすを要せずとして曰く

学レ禅者曰、草木鳥獣之生亦皆是幻、曰子以為生二息於春夏一、及レ至二秋冬一、便却変壊、便以為レ幻、故亦以二人生一為レ幻、何不レ付二与他一、物生死成壊、自有二此理一、何者為レ幻。　（語録、巻一）

と。仏氏が死生を恐懼し、而して死生を以て一如とせざるは、要之只是箇意見皆利心也と利心によるものとして非難しているが、

釈氏苦二根塵一者皆是自利者也。　（語録、巻二）

に依れば、仏氏が根塵に苦悩するのも自利によるとなしている。次に釈氏はただ上達のみを務めて下学を廃し上下一截ならざるを以て正道にあらずとして曰く

惟務二上達一而無二下学一、然則其上達処豈有レ是也、元不二相連属一、但有二間断一、非レ道也。　（語録、巻八）

と。釈氏には識心見性あるも存心養性の一段はなしとし、その出家独善は道体に於いて足らずとなして次の如く評している。

孟子曰尽二其心一者知二其性一也、彼所謂識心見性是也、若二存心養性一段事一則無矣、彼固曰二出家独善一便於二道体一自不足。　（同上）

これ彼が仏氏の識心見性を認めるはその上達のみ許容しているもので、確かに仏禅の長所を認めてはいるが、然し足らざる所ありと難じ、儒の完全なるに及ばないとしているのである。彼は佗有二一箇覚之理一（遺書、巻二）と、仏氏には覚の一理のみありとなして、茲に於いても仏氏の長所を是認している如くであるが、これを

釈氏之云レ覚、甚底是覚二斯道一、甚底是覚二斯民一。　（語録、巻八）

と非難し、彼においてのみ自ら覚者となし、予将下以二斯道一覚中斯民上（同上）と称している所は当を失するものと思われる。釈氏の地獄方便説を駁してこれ偽にして真な

らずとして曰く

釈氏地獄之類皆是為二下根之人一設二此怖一、令レ為レ善、先生曰至誠貫二天地一、人尚有レ不レ化、豈有下立二偽教一而人可レ化乎。（同上）

と。

明道の死生観と仏禅との関係を窺い、併せて彼の仏教に対する論評を述べたのであるが、彼の死生観は仏禅のそれと相通ずるものであるが、然し彼の死生に対する評論はこれを容易に首肯し難い。その排仏毀禅は要するに仏禅家が自私独善にして倫常を無視する（語録、巻八に其術大概且是絶二倫類一、或は仏卒不レ可二以治二天下国家一とある。）にありとする所に存するものであるが、大乗禅は決してかくの如きものではないとすべきであろう。

以上において明道の人間形成観主としてその方法論を窺ったのであるが、彼は仁を識得し本性の極限善に復帰する禅に所謂返本還源に依る為聖作仏を以て人間形成の究極目的としている。本性徹見に依って、かかる人間像形成の存養法として彼は敬直と義方の二面を立しているが、敬直は存主不懈純一無雑の観想法であり、義方は言動の端荘恭謹と為善去悪に依る主として居敬のための外修法である。その去悪は情蔽の根本としての習心の除去にあることは論を俟たない。敬と義の内外両修を以て仁現成の基盤となし、人格形成に不可欠な前提要件としている。この内外動静を両忘し一如の玄を得ば、澄然無事定中して遂に廓然大公物来順応の聖境に遊戯し得る。無住無滞常に直心を行ずる心境が現前するので、禅に於ける随処作主、立処皆真に他ならない。茲に本来面目が現成し、臨済の所謂独脱無依道人なる人間像の完成がなされ、人格形成の目標が確立される。禅の人間像は大死一番絶後蘇生のものたることを要し、大死一番底の極限状況を得なければその人間像の成立は不可能である。畢竟本来的面目の自覚が禅的人間像形成の核心でなければならない。この死との対決は禅林これを禅的人間像形成上重要課題となしているが、明道は勿論儒教一般に於いても禅門ほど深刻かつ真剣に取組む態度の存しないことは否定できない。

註、坐禅用心記に徴して戒・定・慧についての説明を見るに次の如くである。

戒是防非止悪、坐禅観二挙体無二一、抛二下万事一、休二息諸縁一、仏法世法不レ管、道情世情雙忘、無二是非一、無二善悪一、何防止之有乎、此是心地無相戒也、定是観想無余、坐禅脱二落身心一、捨二離迷悟一、不変不動、不為不昧、如レ癡如レ兀、如レ山如レ海、動静二相了然不レ生、定而無二定相一、無二定相一故、名二大定一也、慧是簡択覚了、坐禅所知自滅、心識永忘、通身慧眼無有二簡覚一、明見二仏性一、本不二迷惑一、坐二断意根一、廓然瑩徹、是慧而無二慧相一故、名二大慧一也。